すみだ地域学情報 We!

第51号
2020年
（令和２年）
１月発行

発行：墨田区（地域活動推進課）
〒130-8640　墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎03-5608-6202　FAX 03-5608-6934
✉KATSUDOSUISHIN@city.sumida.lg.jp

つながる墨田区

観光歳時記　おすすめ穴場スポット

墨田区には、桜や紅葉などの名所や歴史的、文化的な名所が多く、四季折々のイベントも開催されています。

もうすぐ梅の季節です。今年は２月15日（土）から開催する「香梅園梅まつり」（小村井香取神社・文花２―５―８）は、85種120本の梅の木が咲き誇り都内でも有数の名所で、当日はお琴の演奏や抹茶接待があります。少し歩くと「立花大正民家園」（旧小山家住宅・立花６―13―17）があり、２月下旬から雛人形展が開催されます。また、河津桜が咲き誇る旧中川水辺公園もあり、梅と桜のお花見ついでに近隣を散策してみてはいかがでしょう。

「向島百花園」（東向島３―18―３）は、江戸時代後期に開園し「新梅屋敷」と呼ばれ親しまれました。２月の土曜・日曜には、すずめ踊りや江戸大道芸なども披露され、大勢の方で賑わいます。５月～７月には、カルガモ親子が園内を歩き回っているのに遭遇できるカモしれません。

春

隅田川の墨堤さくらまつりや錦糸公園桜まつりなどが開催されますが、今年は隅田公園の改修工事が完了し、東武鉄道高架下の「ミズマチ」が開業することから、様々なイベントが予定されています。浅草から東武鉄道の鉄橋にかかる人道橋「すみだリバーウォーク」を通って、多くの方が墨田区を訪れることでしょう。また４月初旬からは隅田川沿いで、墨田区内外の団体による水辺関連イベントが計画されていますので、楽しみにしていてください。

夏

隅田川花火大会や各町会などの盆踊り、すみだストリートジャズフェスティバル、錦糸町河内音頭のほか、平成30年から台東区との観光連携事業として実施している「隅田川とうろう流し」が８月中旬に開催されます。吾妻橋上流側の隅田川の両岸からそれぞれ思いを込めた「とうろう」を流しますが、浅草側と違い、墨田区側は比較的待たずに落ち着いて流すことができます。

秋

亀戸天神社祭や牛嶋神社例祭、「すみだまつり・こどもまつり」、弘前ねぷたの引き回しのある「北斎まつり」、そして「スミファ」が始まる頃には、墨田区内も紅葉で色づき始めます。隅田公園や旧安田庭園、回向院などは区内でも有数の紅葉スポットです。中でも「飛木稲荷神社」（押上２―39―６）のイチョウの木は樹令千年をこえると言われ、東京大空襲前夜の空襲で損傷を受けたものの健在です。そのイチョウの木には狐が隠れているようですので、探してみてはいかがでしょう。

冬

毎年12月14日は、忠臣蔵で有名な本所松坂町公園（両国３―13―９）で開催される義士祭が執り行われ、迎えた新年は隅田川七福神で始まります。また、区の北部にある多聞寺の敷地内には、ＮＰＯ法人寺島・玉ノ井まちづくり協議会が運営している区内唯一の農園である「たもんじ交流農園」（墨田５―30―19）があります。江戸野菜の寺島なすの栽培や、取れ立ての野菜を使ったバーベキューやピザパーティなどのイベントが季節によって開催されていますので、立ち寄ってみてはいかがでしょう。

その他にも今年は、東京オリンピック・パラリンピック関連イベントも区内各所で予定されています。区の広報紙や墨田区観光協会のホームページ、フェイスブックなどでご紹介していきますので、ぜひご覧ください。区民お一人お一人が、お気に入りのスポットをご紹介していただくことが「おもてなし」の第一歩です！

（一般社団法人 墨田区観光協会
理事長　森山　育子）

すみだに花開く黄檗文化

鐵牛道機をめぐる人々と作品

黄檗文化とは、承応3年（1654）に中国僧・隠元隆琦が伝えた黄檗禅や建築、絵画、彫刻、食べ物などのことです。黄檗禅は、当時最新の禅として大変注目され、ともにもたらされた明朝体やインゲン豆などは、私たちの身近に今もある黄檗文化の恩恵といえます。

向島に開かれた弘福寺（向島5―3―2）は、黄檗文化が江戸に伝えられて間もない延宝2年（1674）に開かれました。幸運なことに現在の弘福寺には、その頃に制作された絵画や墨蹟が伝来しています。今回は、当時人々が憧れていた新しい黄檗文化を向島に花開かせた人物に関わる作品をご紹介します。

最初に弘福寺を開いた黄檗僧・鐵牛道機を紹介します。鐵牛は山口県出身とされ、隠元の弟子・木庵性瑫から黄檗禅を学びました。師の木庵が将軍に謁見するため江戸に行く際は鐵牛が随行するなど、鐵牛に信頼を寄せていました。老中を務めた稲葉正則をはじめ、多くの大名や有力者が帰依し、各地の寺院を開きました。弘福寺に残る喜多元規筆鐵牛道機像（図①）は、凛とした表情で曲彔（椅子のこと）に座る鐵牛の顔をリアルに描いています。鐵牛が弘福寺に入った後、大名や有力者が数々のお堂を建てたので、向島の地に壮麗な伽藍が現れました。

①喜多元規筆鐵牛道機像

鐵牛は、向島に新しい寺院を開いてほしいという有力者たちの願いに応えて、弘福寺開山となりました。彼らの中で、江戸城の工事にも関係したと考えられる石屋・小関了元という人物がいます。了元は向島に初めて誕生した黄檗寺院の弘福寺のために仏像を造り、仏堂を建てるなど協力を惜しみませんでした。弘福寺には、了元の自画像に鐵牛が賛を付けた掛軸が、妻の尼僧像とともに残されています（図②）。鐵牛の賛は、弘福寺との関係が生まれる以前の寛文7年（1667）との紀年銘が記され、了元の人柄を業績と仏道修行の双方から称える内容です。

②小関了元自画像

向島の人々が黄檗寺院を開く願いを実際に鐵牛につないだのが、鐵牛の弟子・兆溪元明です。兆溪は仏道修行よりも絵を描くことを好み、室町時代の画僧・明兆を大変尊敬し、彼が描いた五百羅漢図を密かに模写したいと考えていました。そして、その望みを叶えて描いたと言われる作品の一部が、弘福寺に現存します（図③）。この作品は、延宝5年（1677）春、鐵牛50歳の年に先ほど紹介した小関了元の表装で完成しました。作品は、弘福寺でお披露目されただけではなく、当時の老中・稲葉正則の江戸屋敷にも運ばれ披露されています。江戸時代の五百羅漢図といえば、増上寺に伝わる狩野一信の五百羅漢図が知られていますが、兆溪作品は、それよりも200年ほどさかのぼる貴重な作品です。

これらの作品は墨田区登録有形文化財（絵画）弘福寺所蔵絵画資料の一部で非公開です。『墨田区文化財叢書第八集　牛頭山弘福寺の絵画・墨蹟』（墨田区教育委員会、2019年）に掲載しています。

③兆溪元明筆五百羅漢図（伏虎）

（墨田区文化財保護指導員　川本　恭子）